

「舣五山茶」の栽培を約60年続けている御嵩町立上之郷中学校の茶園で17日、全校生徒40人や地域の人たちによる茶摘みがあった。31日には恒例の「茶話会」があり、大人が持ち寄った菓子や漬物と一緒に新茶を味わう。稲垣隆幸校長によると、1955年に当時の校長らが発案し、林を開墾、1・4畝の茶園を造成したのが始まり。子どもたちも飲むものだからと、



早乙女姿で新茶を摘む女子生徒ら＝御嵩町

伝統の茶摘み 友と楽しむ

除草などの手間をかけて無農薬栽培を続けている。茶の名は、五つの山が舟の舣先を合わせるように集まったところに茶園があることから名付けられている。

早乙女姿の竹腰帆乃香さん(14)は「一つ一つ自分の手で摘んで、お茶の葉が籠にたまっていくのが楽しい」。衣装は2年前に5着新調し、3年の女子生徒7人のうち昨年着なかった人が身につけた。

茶蒸し、茶もみ、乾燥までがこの日の体験学習。大人は1週間ほど茶摘みを続け、製茶して道の駅で販売するほか、ふるさと納税の返礼品にする。

今年から、名古屋芸術大学と協力して新しいパッケージに。茶摘みに参加した学生によると、伝統の意匠を生かして緑の色合いを淡く、「Hegoyama Mitake since1955」の文字を小さく入れたという。(松下和彦)

「舣五山茶」作りに精

御嵩・上之郷中生ら 茶摘みや茶もみ

御嵩町中切の上之郷中学校の生徒たちが十七日、同校伝統の「舣五山茶」の茶摘み、茶もみ体験に精を出した。

イン学部の協力で、昨年度からパッケージデザインの新に着手した。この日の作業には大学生も加わり汗を流した。



大学生とともに茶葉をもむ生徒＝いずれも御嵩町の上之郷中で

新茶は三十一日の茶話会で楽しむ。初めて茶もみをした一年の大海人さん(二)は、「先輩たちに教わり、むしらの目に葉が詰まらないように丸めたり広げたりしながらもんだ。楽しかったし、自分たちのお茶が飲める日を思うと今からわくわくします」と話した。

今回摘み取った分



名古屋芸術大の学生らが考案した舣五山茶の新パッケージ

ら使ったパッケージは和紙風のラベルを使い、これまで深緑色だったロゴが、生徒のみずみずしい若さと新茶をイメージした若草色に変わった。「かりがね茶」「特選茶」などと書かれたシールも作った。七月の発売を予定している。(神谷慶)

生徒が袋詰めして販売している舣五山茶は、名古屋芸術大(愛知県北名古屋市)でザ